視点・論点⑦

「ペシャワール会」伊藤さんの死をめぐって——天皇の「弔意」と「在位二〇年」祝意の強制

天野恵一

福田首相の政権放り出しと、茶番の自民党総裁選、予定通りの麻生政権の誕生、アメリカ発金融パニックの大騒ぎ、円高・株暴落、大不況。政局、世界経済の大激動、すっかりマスコミの話題としては忘れられた形になっているが、八月末の、アフガニスタンで活動していた「ペシャワール会」の伊藤和也さんが殺されてしまったという悲劇的な事件をめぐる問題について、私たちは、こだわり続けるべきだ。

この時、福田政権は、「ペシャワール会」の活動と「テロとの闘い」（軍事活動）を同一のものと位置づけ、「平和協力国家」としてその闘いを続けよう、と決意表明してみせた。私は、こういう欺瞞的な発言に強い怒りをおぼえた。日本政府の米軍中心の侵略占領軍への軍事加担こそが、まるごしで、政府の資金援助も受けずに、現地の人びとの生活を内側から支え続けてきた、非軍事の憲法（九条）の精神を生きる「ペシャワール会」の活動を、窮地に追い込み、伊藤さんが殺害されるという事態までつくり出したのだ。その死を、自分たちの責任を棚上げにして、反対に政治主義的に利用して、戦争加担を合理化し、平和支援のベールをかぶせて正当化して見せる。福田政権のこのハレンチな「弔意」表明。

日本国際ボランティアセンター（JVC）の谷山博史は、「武装ガードをつれて、軍隊にNGOが守ってもらえ」と言う主張に対して、こう論じている。

「そこには当然タリバーンの活動にアクティブに関わってなくても、当然、昔、東部・南部はタリバーンの地盤だったわけだから共感を持った人たちはたくさんいるわけです。でも平和に一緒に暮らしているわけよ。JVCだとか外のNGOが入ってきても最低限この人たちは受け容れようというコンセプトがあるから安全に活動できるわけですけど、そのときに、一方で自分たちの仲間が闘っている米軍を引き連れてきたら、おそらく完全に狙われるんですね。そういう現実があるので、僕たちを守るのは非武装ということです」（アフガニスタンで何がおきているのか」『インパクション』（〇八年一〇月、一六五号）。これが本当の現地の実態なのであろう。軍事協力がまともな「復興支援」活動を不可能にしてしまうのである。

さて、あらためて弔意である。

「静養中の天皇皇后両陛下は28日、伊藤さんの両親とペシャワール会に対し、侍従長らを通じて弔意を伝えた」。『朝日新聞』（八月二九日）は、天皇の「弔意」について、このように小さく報道した。この件について、よりこまかく「反天皇制運動連絡会」のニュース『あにまる』（21号）の「野次馬日誌」は、このように伝えている。

「［8月28日］静養先の長野・軽井沢から群馬県草津市に移り、開催中の音楽祭『第二十九回草津夏期国際音楽アカデミー&フェスティヴァル』を訪問。美智子がピアノのレッスンを受ける。予定していたコンサート鑑賞は、アフガニスタンでNGO『ペシャワール会』の男性が死亡した事件を受けて取りやめる。／侍従長らを通じ、アフガニスタンで武装グループに拉致され死亡した『ペシャワール会』の男性と両親と同会に弔意を伝える。宮内庁によると、川島裕・侍従長が高村正彦外相に弔意の伝達を要請」。

この天皇の弔意の政治的意味は何か。「平和協力国家」として新テロ特措法を延長して「反テロ戦争」に積極的に協力しようと決意表明してみせた福田政権の政治姿勢（これは麻生政権に引き継がれている）が示すものと同じである。

天皇はカンボジアPKO活動で殺された文民警察官には勲章と賜杯を授与し、その死を讃え（一九九三年）、イラクの戦場で殺された外務省の役人には「旭日双光章」と供物の菓子を与え、その死を讃えた。

「ペシャワール会」の死者への、わざわざコンサート鑑賞を取りやめての天皇の弔意の表明は、すこぶる政治的なものである。自衛隊の海外派兵活動を、大切な「国際協力」としてたたえる発言をアキヒト天皇は繰り返してきており、この天皇のわざわざの「弔意」表明は、戦争に「平和協力」の美名のベールをかぶせて持続している政府の欺瞞の政治を後押しする政治活動である。

この天皇の「在位二十年奉祝」（式は来年一一月一二日）のキャンペーンが、すでに開始されだしている。「即位礼」が行われた日の祝日化のための法案準備も進んでいる。

私たちは、この「祝意」を強制するキャンペーン（儀式）に抗し続けるために、天皇の「弔意」の政治を批判し続けなければなるまい。

（あまの・やすかず／反安保実）